



河童の里 牛久沼へ



河童絵の画聖 小川芋銭

小川芋銭(本名・小川茂吉)は、明治元年2月、東京赤坂溜池にあった牛久藩邸で生まれました。芋銭の父親は牛久藩の大目付だったこともあり、幼い頃から高い教養を受けたと思われず。明治4年廢藩置県により、芋銭の父は農業にて生計をたてることを決意。小川家はみな牛久へと移り住み、農家になりました。このとき芋銭は3歳。その後、牛久学舎(現牛久小学校)で学び、芋銭が11歳のとき再び上京。親戚筋に身を寄せ、13歳になると画学専門校「彰技堂」に入学し4年間洋画を学んだあと、20歳になるまで親戚の小間物屋などで働きながらも絵を描くことに熱中していました。

芋銭が20歳(明治21年)のとき、後に「政界の麒麟児」と言われた尾崎行雄の推挙により朝野新聞社の客員となります。この年画家・浅井忠ら特派に随行し、会津磐梯山大噴火の惨状を、新聞へ掲載するため描いたと言われています。それ以降、芋

銭は朝野新聞などに挿絵を描き、収入を得ていました。

しかし、東京で画家として働いていたものの、父親の命により、25歳のとき、画家として成功する夢を抱きつつ、牛久へ戻り農業にはげみます。そして27歳で「きい」と結婚。虚弱体質で農業がづらい芋銭に代わり、妻きいが夫の分まで働いて、芋銭が画業を続けられるようにと支えました。

長男が生まれた翌年の明治36年、読売新聞の懸賞絵画に応募した「新年の意」という作品が第一等当選し、元旦の紙面に掲載されました。また、当時すでに地元元(いばらき新聞)に依頼され挿絵などを多く描いていました。その他、多くの新聞や雑誌などに挿絵を描いていました。

大正6年、横山大観らに推挙されて日本美術院の同人となり、画業にはげみ、独自の画境を拓きました。こうして、昭和13年12月17日に70年の生涯を閉じるまで、画家として、さまざまな作品を残しています。



明治42年5月19日国民新聞に掲載された芋銭の挿絵



場所:牛久市城中町2770-1
JR牛久駅西口からバス
「三日月生涯学習センターゆき」で約10分、
「牛久第三中学校」下車、徒歩20分
問い合わせ:小川芋銭研究センター
☎029-828-7985
月～金 9:00～17:00(ただし
第2・4月曜日は休館、祝日の場合は翌日休館)



河童百図(遊戯三昧)

雲魚亭 館内見学:土・日・祝日
屋外見学:火～金(20名以上の団体なら
館内見学可・要予約)
時間:4～9月/9:00～17:00、
10～3月/9:00～16:00
休館:月(月曜日が祝日の場合は翌日休み)、
年末年始
<http://www.ogawausen.com>



おがわ うえん
小川芋銭
(1868～1938)

本名・小川茂吉。明治から昭和と活躍した画家。また俳句や短歌も多くの作品もある。代表作に「河童百図」「水魅戯」など。「芋銭」は「芋を買うくらいのお金になればよいが」という意味があると言われていています。

Ushiku, the Home of Kappa Water Sprites

Ushiku-numa is a scenic lake that has been a favorite place for many artists such as Usen Ogawa (1868-1938). Various legends about kappa have been passed down through the ages and this connection between the residents of Ushiku and kappa can be seen in the Ushiku Kappa Festival and the kappa statue in the Ushiku Iris Garden.

芋銭の家は牛久沼に近く、晩年を過ごした「雲魚亭」から美しい牛久沼が見えます。
日本各地の水辺にはカッパ伝説が多くあるように、この牛久沼にもカッパ伝説がありました。有名なのは「カッパ松」の伝説ですが、きつと芋銭も幼少のころに、この『カッパ松』のような微笑ましいカッパ伝説を聞き、カッパに親しみを覚えたのでしよう。実際にこの『カッパ松』の伝説が

描いた理由は…
芋銭は生まれながらにして虚弱体質で、しかもかなりのひかえめな性格。でも教養は高く、日本だけでなく中国の文学にも精通していました。また20歳代で尾崎行雄に推挙されていることから推測すると、思想もかなり高いものをもっていたと思われる。でもひかえめな性格なので、なかなか人前で自分の意見を言えない。だから、カッパの絵を描くことで、自分の思いを表現していたのかもしれない。

芋銭がカッパの絵を描いた理由は…

残る松の木が、雲魚亭の近くに
あります。
芋銭は生まれながらにして虚弱体質で、しかもかなりのひかえめな性格。でも教養は高く、日本だけでなく中国の文学にも精通していました。また20歳代で尾崎行雄に推挙されていることから推測すると、思想もかなり高いものをもっていたと思われる。でもひかえめな性格なので、なかなか人前で自分の意見を言えない。だから、カッパの絵を描くことで、自分の思いを表現していたのかもしれない。



「カッパの戯れ」明治末期、挿絵画家として活躍していたころの作品。そのまま新聞雑誌の版下絵として採用できるほど、簡略化された画線に特徴がある。